

# ふみの会 ニュース

■発行 　ふみの会広報部  
 ■発行日 　2006年11月5日  
 ■連絡先 　藤川博樹  
 　　　　　〒115-0045  
 　　　　　北区赤羽1-48-3ドミール藤203  
 　　　　　tel03-5249-5797 fax03-3901-6090  
 ■編集 　中井、塚原、藤川、蒲原雅、佐藤、蒲原直

<http://www.mdn.ne.jp/~fumi/top.html>

## No.298

### 11月行事日程

#### ■ニュース編集

原稿はテキストにして下記へ  
 ワード・一太郎文書も可  
 kamo@sun.email.ne.jp  
 エッセイ：5枚（2000字）  
 小説：10枚（4000字）目安

#### ■締め切り

11月19日（日）

#### ■年会費

1200円（年）  
 切手80円×15枚  
 郵便振替：東京00170-1-18290



◆肉体派シンガーソングライター：カガミユナとジョイントライブをやりました。甲府の南、中央市のBOSSという店です。ユナは一度聞いたら忘れられない迫力の歌を唄います。歌の中身も全てオリジナルで、そこにはこだわっています。メジャーになってほしいなあ、と思うのですが本人にはその気がないようです。元ボクサー、40過ぎて独身、酒は飲むが飯は食わない徹底した生活、アスリートだ、と思います。(2006/10/28)

### 『吉田悦郎さん激励会』

日時：十一月十九日（日）十一時～

場所：大宮西口 『庄や』

（西口駅前通りソニックシティと武蔵野銀行の間）

ふみの会発足以来の会長で、会の大黒柱であった吉田悦郎さんが脳梗塞で倒れてからかなりの時間がたちました。右半身の麻痺が残り、言語にもやや不自由はあるものの、いたって元氣な悦郎さんが戻ってきています。

吉田夫人の協力を得て、リハビリを兼ねた激励する会を設けました。関東在住のメンバーはお誘いあつてご参加ください。

地図 下記の通り  
 大宮駅徒歩五分



ニュース300号に原稿をお送りください  
 「ふみの会ニュース」は次々号で三百号になります。  
 ぜひ記念原稿をお寄せください！

## 秋の短編2

## コバさんのキャラバン

蒲原ユミ子

パチッ！  
パチャッ！  
ペチッ・・

小さな子どもたちと、エプロン姿のコバさんが手のひらを合わせてさよならしています。

コバさんのポケットに手をつっこむ子どももいます。出てきたどんぐりに、子どもが「やったあ」と喜びました。コバさんが子どもたちにあげるために拾っておいたものなんです。

さよならが終わると、コバさんは、「おはなしキャラバン」と書かれた赤い車に、紙芝居やパネルシアターの道具を積みました。

運転席にすわるなり、(ふう〜)と、コバさんは大きな息をつきました。長年やってきた大好きなこの仕事も荷物を積み終わると、どっと疲れが出るようになりました。

(そろそろ、やめる潮時かしらね) と思いながら、コバさんは保育園の門を出ました。車の後を、色づいた紅葉やイチョウの葉が舞い上がって追いかけてました。

家への帰り道に夕飯の買い物をし

ていたら、すっかり夕闇こくになりました。

車がコバさんの家に近づいたときです。ライトの中に、女の子の走っていく姿が見えました。赤いスカートをはいています。コバさんはスピードを落としました。それなのに、「あれ？」

女の子の姿が、闇にとけたように消えました。コバさんは目をぱちぱちさせて車を止めました。ちょうどコバさんの家の前でもありました。

(ふしぎね・・もしかしたら、わたしの目がかすんできたせいかしら?)

ともかく、コバさんはバックして車を駐車場に入れました。そして、バッグやスーパリーの袋をかかえて車を出たコバさんは目をみはりました。駐車場の隣に、小さな家作が建っているのですが、長い間人が入っていないのかつたのに、きようは明かりがついているのです。

(どんな人が入ったのかしら)

コバさんは駐車場の奥にある自分の古い家に向かいました。この家は、コバさんの両親が残してくれたものです。

コバさんが子どものころ、このへんは原々していて家はぼつんぼつんとしかありませんでした。けれど、駅からそう遠くないためかどんだん家やビルが建ち、もう空き地や原っぱはほとんどなくなりました。

コバさんは大きく息をついてから玄関を開けました。そして、荷物を置くとそのまま玄関で腰を下ろし一息つきました。

(ふう〜 つかれたこと・・)

まもなく、玄関の引き戸の向こうから、小さく「ミヤア」と鳴き声がありました。コバさんは痛む腰をあげました。

「ミイちゃん、ちよつと待つてね」

コバさんはスーパリーの袋を持って台所へ行き、中身を冷蔵庫に入れました。それから、冷蔵庫わきにあるダンボールから猫用の缶詰を取り出すと皿とスプーンを持って玄関へもどりました。

引き戸を開けると、だいぶ年を取った三毛猫がのっそり入ってきました。コバさんが缶詰を空け皿に移すまで、行儀よく待つています。

「さあ、ミイちゃん、たつぷりお食べ」

ミイちゃんはゆっくり口を近づけ、はぐはぐ食べ始めました。

ミイちゃんはこのへんの野良猫です。コバさんは猫たちがおいしそうに餌を食べるのを見ると気持ちが悪くもつたりするのです。以前は、もつとたくさんの野良がいたのですが、このごろはミイちゃんの姿しか見ません。

こんなに家がびっしり建ったのは、野良猫の居場所がなくなってしまったのでしよう。

コバさんはミイちゃんに牛乳もやりました。ミイちゃんはおなが満足すると、また外へ出て行きました。コバさんはひとり者で家を空けることが多いので、猫を家の中で飼うことはできないのです。

ミイちゃんの夕ご飯がすんだので、こんどは自分の分の準備です。準備といっても、このごろはお弁当やカップ味噌汁を買ってきているので、お湯を沸かすだけです。つかれてはいるけれど、このごろはあまり食欲もありません。でも、食べなくては体が持ちません。

コバさんはヤカンに水を入れながら、さつき消えたようにいなくなっ

た女の子のことを思い出しました。  
なにかしら、懐かしいような、苦い  
ような・

ガスがシュツと勢いよく青い炎を  
あげた時、コバさんはずっとずっと  
昔のことを思い出してしまいました。

戦争が終わってまもなく、コバさ  
んは小学校の先生になったことがあ  
るのです。先生が足りなかった時代  
で「代用教員」という役割でした。  
コバさんは学校を卒業したばかりで  
若い盛りでした。

もうサイレンが鳴って防空壕に入  
ることもなくなっていたので、子ども  
たちは元気だったけれど、戦争でお父  
さんをなくした子もいました。

まだ給食はなくて、お昼は弁当を  
持ってきていましたが、弁当を持つ  
てこれない子も何人かいました。そ  
れでコバさんは、ほの子が弁当を食  
べている間、そういう子達に本を読  
んでやったりお話をきかせたりして  
いました。

おなががすいてひもじいはずなの  
に、子どもたちは目をきらきらさせ  
てコバさんの話に聞き入っていたも  
のです。その中でも、いつもうす汚  
れた赤いスカートをはいた女の子は、  
特にお話が好きなようでした。でも、  
女の子はろくな物を食べていないせ

いか、やせっぽちで小さかったので  
す。

コバさんは悩みました。自分の弁  
当を半分女の子に分けてやった方が  
いいのではないかしら。でも、弁当  
がないのはその女の子だけではない  
し。ほんとうを言えば、若いコバさ  
んもおなががすいてすいてたまらな  
かったのです。

寒い木枯らしが吹くようになった  
ころ、女の子は学校にも来なくなり  
ました。栄養失調になったのです。  
コバさんが女の子の家をたずねてみ  
なくちやあと思っているうちに、女  
の子は肺炎にかかり、あつげなく死  
んでしまいました。

コバさんは、女の子に弁当を分け  
てあげなかったことを、深く後悔し  
ました。



ガスコンロの上で、ヤカンがシュ  
ツシュツと沸騰しています。コバさ  
んはのろのろと立ち上がり、火を消  
しました。  
コバさんは先生の仕事はじきにや

め、いろいろな仕事をした後、やつ  
ぱり大好きな「おはなしキャラバン」  
を始めたのです。

絵本や紙芝居を集め、パネルシア  
ターのキャラクターを少しずつ作り  
ました。今では、毎月違う「出し物」  
をたつぷりたくわえています。けれ  
ど、あちらこちらの保育園や小学校  
を車でまわり、ぜんぶ一人でやるに  
は年を取りすぎたのでしょうか。こ  
のころ、やけにつかれが残ります。

それに、きょうは若かったころの  
自分のみにくい過去を思い出し、コ  
バさんはすっかり力がぬけてしま  
いました。

ピンポン！

玄関でチャイムが鳴りましたが、  
コバさんは立ち上がるのもおつくう  
でした。何かのセールスだったら出  
たくありません。

ところが、だいぶ時間をおいてま  
た、ピンポンと鳴りました。セー  
ルスではないようです。コバさんは  
重い腰をあげました。

玄関を開けると、そこに若いお母  
さんと女の子が立っていました。お  
母さんは頭を下げてから言いました。  
「おつかれのところ、すみません。  
今度、前の家に引越してきた杉山  
といいます。よろしくおねがいしま  
す」

コバさんは背筋をしゃんと伸ばし  
ました。

「こちらこそ、よろしく」

若いお母さんはちよつとあたりを  
うかがい、

「うちは母子2人なので、なにかと  
ご迷惑をおかけするかもしれませ  
んが、よろしくお願いします」

コバさんはこの母が急に好きに  
なり、笑顔になりました。

「わたしはひとり者だから、よけい  
なお気遣いはなさらないので  
すよ」

すると、お母さんの顔がばあつと明  
るくなったようでした。

後ろを向いた女の子がさげびまし  
た。

「あつ、ネコちゃん！」

「ミイちゃんがまだ車の下にいたよ  
うです。コバさんは、

「ミイちゃんというのよ」

と教えました。お母さんが嬉しそ  
うに聞きました。

「楽しそうな車ですね。お仕事です  
か」

コバさんはうなずきました。お母  
さんは安心したように言いました。

「いいお仕事ですね。わたしもお話  
が大好きなんですけれど、忙しくて  
なかなかこの子に聞かせてやれない

んですの」

女の子は車の方へ行き、おもしろそうにじろじろ見始めました。コバさんの赤い車には、ゾウやキリン・おさるさんなどがかかれています。動物好きの子どもならそれだけでどりこになつてしまうのです。ミイちゃんもにげないで少しはなれた所に入ります。

女の子は赤いスカートをはいいます。やはり、さつきライトの中で見た女の子でしょうか。

女の子はスキップしながらお母さんのところへもどつてきて言いました。

「ひっこしてきてよかった!」

お母さんは大きくうなずいてからコバさんに聞きました。

「この場所でも、おはなしキャラバンをなさっているのですか」

コバさんは思わずお母さんに、

「ええ」

とうなずいてしまいました。ほんとうはここでやったことはないのですが、なぜか、コバさんはこの若いお母さんに、「いいえ」と言えなかったのです。

お母さんは女の子と顔を見合せて言いました。

「よかったね、いいところに引越してきて」

そして、もう一度コバさんに頭を下げました。

「ほんとうによろしくお願ひしますね」

コバさんは深くうなずきました。

「こちらこそ、お世話になりますよ」

2人が帰つていった後、コバさんは台所のテーブルの前に腰を下ろして考えました。

そう。ここで、わたしのおはなしキャラバンをやればいいのだわ。狭いけれど、やれないことはない。

わたしたつたら、遠くへ出かけてたくさんのお客さんに見せることばかり考えていちやうつた。お客さんは一人でもいいし、それもきつと楽しいに違いないわ!

さっそく、駐車場に立てる「おはなしキャラバン」の看板も作つてもらわなくてはね!

これからのことを考えているうちに、コバさんはとてもおなががつてきました。コバさんは立ち上がつてひとり言を言いました。

「いいご近所さんで、本当によかつたこと」

そして、少しさめてしまったヤカにもう一度火をつけました。

## ピアノ (2)

中井豊

昼休みに音楽室を覗き、佐藤先生がグランド・ピアノを弾いているのに出会ったことが一度ある。何の曲を弾いていたかは思い出せない。練習曲だったかも知れない。一段落するのを見計らつて、近寄つて行き、「リストの『ハンガリア狂詩曲』はどうですか?」

と言つてみた。

「リストはピアニストでないと無理さ」

と言ひ、それでも、先生は、弾き始めた。

「この和音の筈……」

とつぶやきながら、しばらく冒頭の部分を何も見ないで弾かれた。それは初めて目にする芸当だった。《和声進行の理論に基づいて弾いているらしい》とは思つたが、……。

当時の尾鷲高校には「ハワイアン」というクラブがあった。ハワイ風の音楽が流行していたのだろう。ステイール・ギターやウクレレでハワイ

風の音楽を合奏するクラブだった。どのクラブ活動にも私は参加していなかったが、この「ハワイアン」クラブの練習が通りすがりに見えた。佐藤先生が顧問で、指揮をしていた。その合間に、佐藤先生は生徒のアカデオンを借りて、短い曲をさらさらと弾いて遊んで見せた。そして、「十曲ばかり覚えれば弾けるようになるよ」

と言つて苦笑された。

下校の折り、佐藤先生と話しながら帰つたことがある。数学の話だったかどうかは忘れたが、先生は真直ぐ駅へ向かわず、話しながら一寸回り道になる私の家の前までついて来られた。その何だか友人であるような感じの振る舞いは、今でも心に残っている。

こんなこともあった。卒業式か何かの式に備え、体育館で校歌の練習があった。伴奏は音楽の先生ではなく、佐藤先生だった。式の練習が終わつて、教室へ引き揚げようとして

いると、片づけられたピアノで佐藤先生は校歌を夢中で弾いていた。伴奏ではなく、ピアノ曲として校歌を弾いておられたのである。いま思うと、伴奏だけでは欲求不満になったに違いない。

「團伊玖磨は校歌でも手を抜かず、いい曲を作っている」

と弾きながら話し掛けられたことを思い出す。

夜、暗くなって佐藤先生と一緒に下校した時、

「下駄で歩いていると、シューベルトの『セレナーデ』に聞こえる」と言うのと、

「ギターの練習で弾いている」

それで、先生はどんな楽器にも挑戦して来られたということが想像された。そう言えば、

「指揮者というのは、ほとんど全ての楽器が或る程度弾けるらしい」

と話されたこともあった。とはいえ、対人関係が苦手な先生が指揮者になるうと考えたことはなからう。

翌年、私の一家は引越すことに5なり、私は古座高校へ転校した。親しかった同級生に見送られ、列車で尾鷲駅を発つ直前、ベージュのレインコートを着た佐藤先生が通りかかり、小声で、

「オレも転勤になった」

と仰有った。

一別して半年後、佐藤先生から葉書が来た。

——この度、東大の工学部計数工学科の助手に呼ばれ、分不相応だとは思ったが、勉強がしたいので移ることにした。

というようなことが書かれてあった。先生は第三高等学校から名古屋大学の数学科へ進んだものの、《自分分は純粹数学に向かない》ということで、東大の工学部応用数学科に移り、こちらの卒業生だった。しかし、数年後、音楽学会で「音程量子論」といった論文も発表されたように、実は音楽理論はお手のものだったのである。楽器の調律、楽曲の編曲などは先生の勉強でもあり、道楽でもあった。

高校二年から和歌山県の古座高校へ転校しても音楽の時間があつたのかどうか——どうしても思い出せない。ピアノどころか、クラシック音楽を聞く機会も殆どなかった。わずかに文化祭で「レコード鑑賞」の部屋があつて、オーディオ好きの生徒が大きいステレオを持ち込んでレコードを掛けたりしていた。その際、シューベルトの『弦楽四重奏曲《鱒》』を聴いたことだけが記憶にある。ひ

とことと言えば、こちらは現実的理想のない学校だった。

この高校で三年生になり、秋の体育祭や文化祭が終わった時分だだったと思う。ふと音楽室の前を通りかかると、グラランド・ピアノに向かってモーツアルトの『トルコ行進曲』（ピアノ・ソナタK331の第三楽章）を弾いている男子がいた。とても小柄で目のきれいな生徒だった。側に行つて、しばらく演奏を聴いていたように思う。確か、修学旅行不参加者として一緒に自習したことがあつた、ちよつと陰気というか、静な雰囲気帯びた生徒で、心は別の世界にあるようだった。

この日、あまり話したがらない彼の家まで随いていった。紀勢本線の線路が上を走る道路の脇に彼の家はあつた。一階の道路に面した部屋は床がコンクリートで倉庫のようになつていて薄暗く、隅にアップライトの新しいようなピアノがあつた。

彼の名は、瀧本文彦といつて、一年留年したことだった。ぼつりぼつりとしか、ものを言わないが、モーツアルトの曲を聴いて涙したことがある、というようなことを言つた。ベートーヴェンは偉大だとも言つた。ちよつと鈍いところのある男にも見えた。しかし、彼には何より

音楽への強い「憧れ」のようなものがあつた。遠くを夢見る若者だと直観した。

(つづく)



小説

## 一人ぼっち

内田幸彦

## (八) 天罰

今日は問題の中学(旧制)入試の発表日である。流石に彦一も落ち着かなかつた。試験なんて、よく出来たと思つた時は案外に悪く、一つも書けなかつたと思うのに案外いい点数だつたり、判らないものである。世に言う水物、(みずもの)かも知れない。

今度はどちらとも判断が付きかねた。そうなると、何時もの呑気さで、《何とかなるだろう》と、合格発表を見に彦一は出掛けた。

午前十時、学校の玄関両側の壁に合格発表の掲示板を事務職員三人が運んできた。一人は台に昇り、一人は台を倒れないように持ち、一人は指示している。発表を見に来た父兄をジラすように、巻紙をゆつくりと拡げた。彦一の受験番号は十七番だつた。

一番から八番までは出ていたが、八番から十一番に飛び、十一番の次は二十番に飛んでいた。彦一の十七番はなかつた。《そんな馬鹿な!》。

改めて見直したが、矢張りなかつた。胸騒ぎは重い失望となつて言葉も出なかつた。彦一は不合格を認めない訳には行かなかつた。

父母に何と言つて報告する? あれ程、塾だ、家庭教師だ、入試だ、目の色を変えて心配していた父母の幻影が彦一を責めた。

あれやこれや思い詰め、二キロもある道をどうして家に帰つたか記憶になかつた。夜、父母にどう報告しよう? いくら考えても、現実は一つ、不合格という現実しかない。

母は先生だから、蛇(じゃ)の道は蛇(へび)で、はや彦一の不合格を知つていた。

「出来た事は仕方がないわ。来年は頑張つてね」

と意外に穏やかであつた。今までの母の態度から考えると、彦一は済まない気持ちで一杯だつた。

「やるよ、今度は!」

彦一は心から済まないと思つた。

夜、会社から帰つた父は、

「どうだつた?」

と、映画評でも聞くような穏やかさだつた。彦一は言葉にならず黙つて首を左右に二、三度振つた。

「そうか、駄目だつたか……。まあいいじゃないか一年くらい。この世の終わりみたいな顔をするな。彦一らしくないぞ。でもな彦一、ここはよく考えろよ。《人生五十年》という言葉があるんだ。知つてるか? 人生は五十年もあるんだから、慌てることはないと教えている。よく考えれば、人生の五十分の一くらいの口スは知れているじゃないか。たつた一年くらい無駄になつたからといって悲観することはない。逆に、お父

さんは彦一のために良かったとさえ思つている。彦一がこれを機会に目が覚め、勉強してくれば、今度の失敗も失敗でなくなると思う。彦一、これも経験だよ」

彦一はハツと目が覚めた思いがした。そんな考え方があるとは、……。

普段は無口で彦一に甘いばかりの父親だと侮つていた父梅三郎を見直した思いだつた。《よし! 今度はやる

ぞ》。彦一は心が燃えた。

とはいうものの、受験に受かり、新しい制服、制帽に重い鞆で前かがみに歩く同級生達の姿は羨ましかつた。生まれて初めての長ズボンにゲートルを巻き、雀のように楽しそうに語らいながら道を行く、……。それに比べ、下駄ばきで、風呂敷の本を小脇に高等尋常小学校に通わねばならない自分の姿は我ながら惨めだつた。《よしやるぞ、今に見ておれ!》彦一は心で叫んだ。

彦一は街でたつた一つしかない高等小学校へ行くことになつた。因果なことに、母はこの高等小学校に勤めていた。自分の息子が入試に落ち、同じ学校に入つて来る。母はこの恥辱に耐えられず、辞職した。彦一はこの日まで知らされていなかった。

朝一番の朝礼に、母は台に立ち、蚊の鳴くような小さい声で生徒に別れを告げた。

「みな様方と永らく一緒に勉強して来ましたが、今度、家庭の事情で辞めさせて頂くことになりました。先

生は永い楽しかった皆様との思い出を決して忘れません。皆様も元気に、勉強に、お仕事に頑張ってください。皆様、お元気で、さようなら」

母は肩を落として演壇を降りた。《家庭の事情は俺だ。心から後悔してここに立っている。お母さんごめん、来年はきつと合格するから》。彦一は心で母に謝った。

先生は母の念願の職業だった。経済的に女学校へ進学出来ぬところを、校長先生の好意で進学し、やっと先生になったものを、……。

### (九) 父、梅三郎の死

一九四五年(昭和20)元旦、父梅三郎は年末の宿直を終え、寒い寒いと震えながら帰って来た。元旦のお祝いもせず、母の敷いた床に潜り込んだ。

あいにく正月だから医者も葉屋も休みだった。熱で顔が赤くなり、呼吸も大きくなって、普通の風邪引きでないことは母や彦一にも察せられた。

四日の朝、やっと医者が来てくれた。父を診察するや、  
「急性肺炎です」  
と、顔を曇らせた。一九三七年(昭和12)に始まった日中戦争が拡大し

て一九四一年(昭和16)の太平洋戦争に突入し、当時は打ち続く戦争に医療品は勿論、米・チリ紙まで配給でも手に入らない時代だった。医者も薬が手に入らなくて、手当の手法もなかったのである。

父は譫言(うわごと)に、会社の決算のことを言ったりした。叔母はな(母英子の姉)は息子の嫁をもらいに九州へ行っていた。

父は苦しい息の下から叔母の帰りを待ち望み、

「西の列車を送ってください」  
と何度も口走り、叔母に会いたがった。

父の願いを叶えるように、叔母は息子夫婦を連れ、やっと父の死に間に合った。宗教家の叔母は鉦を取り出し、父の枕元で、まだ息があるのに、

「ええとこ(よい所)、行きなはれや」と、鉦をカーンと一打ちした。すると、父は待っていたかのようにコクンと首を垂れ、往生した。

彦一は抗議した。  
「なぜ鉦を早く叩いた。鉦は人が死んでからだ。まだ息があるのに殺生なッ！」  
「違います。早くお迎いを頂くのが佛の道です」

と叔母は信じて疑わなかった。父は四六歳の男盛りで故人となった。「象さん」と渾名されるように、大きな体で優しい父だった。仕事を誇りとし、家族を可愛がり、株式売買が上手で、絵・文章も書き、旅好きな多彩な人だったが。

母も彦一も父の死が暫くは信じられなかった。いつも夕方、六時半頃「コツコツ」とゆっくり靴音をたてて帰る。お葬式も済んで半月も経つのに、靴音がすると「お帰りッ！」と玄關へ。そして、他人と判つてガツクリする母と彦一だった。父の死に、そのショックから立ち直るのに一ヶ月以上かかった。

それだけではなかった。母子家庭となると、急に世間も冷たくなり、挨拶を交わしていた人達もそっぽを向き、今まで届いていた贈り物も途絶え、外田の家が寒々としてきた。あらためて大黒柱の父の有難さ、偉大さを感じない訳にはゆかなかった。

それどころではない。父の死によって、その月から収入が無くなった。かつては、共稼ぎで豊かだったが、彦一が入試に落ち、それを恥じた母は既に学校を辞めていた。実際に無収入となつてしまったのである。それで、闇食糧も買えなくなつてしま

った。配給だけに頼り、餓死した人さえいた時代だった。

外田の家を襲った嵐は、それだけでは終わらなかつた。翌一九四六年(昭和21)二月の新円切り換えが命取りとなった。預金は五万円以上は切り捨て。外田の家はどん底に落ちたのである。

父はよく彦一に言っていた。  
「私とお母さんの暮らしは死ぬまで大丈夫のように用意してある。私達の事は心配しないで、自分の事だけを考えなさい」  
この言葉を聞いたのは三度や四度ではない。

悪い事は重なるもので、父が二十八年も勤めた退職金二十八万円まで、根こそぎ切り捨てになつてしまった。母は彦一を大学まで出すように、手つかずで貯金してあつたのである。  
あまりよい詩ではないが、こんな

——滑つて転んだら糞の上。  
一九四六年、外田の家は奈落に落ち、窮乏生活の始まりとなつたのである。以後、四十三年間、彦一は地べたを這いずり廻る貧乏を経験することになる。

(つづく)

## ミュータント

蒲原直樹

混沌市の売り物の一つにサッカーチーム「混沌ソレイユ」がある。一昔前は韓国代表をメンバーにしてJ1リーグの上位に陣取っていたが、本国のKリーグが盛り上がりると韓国代表は本国に帰ってしまった。それからソレイユの低迷が続き、今ではJ2に陥落している。

そのソレイユの本拠地として北部低開発地域「混沌の森」に混沌サッカー場が作られた。となりに県立市民支援センターがあり、天皇や皇族が入院したという国立癌センターがあり、東大混沌キャンパスがある。筑波エクспレスの新駅も出来て「混沌の森」はミニ筑波の様相を帯びてきた。

ステータスを求めて、群玉大学医学部遺伝子研究室もここに移動してきた。バブル前に理事長がこの近辺の安い土地を確保していたらしい。学内ではたいした慧眼だと誉めそやされている。しかし葦加賀市を根拠にしている群玉大学からここへ通う「研究員」にしてみれば迷惑な話だった。

研究室助手の柳原英道は混沌市に安アパートを借りたが、駅前からのバス代が距離の割りに高かったのに驚いた。彼は仕方なく中古の原付を買った。

柳原のいる研究室の目下の研究テーマはPKRG(オメガ)。脂肪細胞などの代謝や肥満、糖尿病、抗ガンに関係した遺伝子だ。これがテーマなのはスポンサーである製薬会社から肥満防止薬の開発を要請されているからである。決定的な肥満防止薬が出来れば世界中から巨万の富が集まることは言うまでもない。

柳原がボトボトうるさい原付を走らせて研究室に着くと、先輩研究員の倉持がいた。無精ひげが伸び、白衣の袖が垢ずんでいる。昨夜から徹夜なのだ。

「倉さん、進みました?」

「ああ、まあまあやな」

倉持は三分刈りくらい短い髪をぼりぼりかいて答えた。京都大学医学部から来たという天才肌のこの男は、一方でマイペースでずぼらな「ジ

コチュー」男として他の研究員や助手たちからうとまれている。

「抽出したやつ、ミューテーションしてもうてな、えらい繁殖力や」

PKRG(オメガ)から分離したRNAがクローニングの間に気質変化を起したらしい。

「だいじようぶスカ、変なウイルスつくって」

「心配すな、まだ大丈夫や」倉持はにやりと笑った。

「そやけどこんなん、外に出したらどえらい騒ぎになるやろな」

見方によってはハンサムな倉持だが、徹夜で黒くなった不気味な笑い顔に悪意がにじんでいる。

「わし、いったん仮眠所にてくるわ……ほなヒデ、あとたのむで」

「はい」

倉持は大きなアクビを一つして研究室を出て行った。柳原が研究室を点検すると、器具類は得体の知れない薬剤で汚れ、あちこち散乱していた。柳原は舌打ちした。後片付けは助手の仕事だ。彼は午前中一杯かけ

て室内を整理し、器具を洗浄した。そのうちに同僚の助手たちがぼちぼち出勤してきた。

「おまえら遅いよ、オレひとりで大変だったんだぜ、マジメにやれよ」

「すみません」「すみません、って、なんだよそれ」

柳原が怒っていると、倉庫から後輩の女助手が駆け込んできた。

「ヒデさん、ネズミがたいへん……巨大化してる!」

「え?マジ?」

助手たちは、次の瞬間倉庫へ走った。彼らがそこで見たものは異様にふくれあがったハツカネズミたちだった。赤目の集団は華奢なケージを破りそうな勢いで動き回り、お互いにおつつかりあっていた。

「これって、倉持さんのしわざ?」

女助手が言った。

「そうだ……」柳原が応えた。

「あの人、ゆうベミュータント・ウイルスを作ったんだ。てっきり保温室に仕舞ったと思ったのに、ネズミに移植していたのか……」

PKRGはヒトの3番染色体の短腕にあり、そこは5億年にわたる脊椎動物のマクロ的な系統発生を記憶した倉庫でもある。それだけにこの遺伝子の操作はパンドラの箱を開けるに等しい。今、このネズミたちを逃がしたりしたら……柳原がそう考え青くなっていると、見る間にケージの蓋がはじけとんだ。

「逃がすな、一匹でも逃がしたらこの研究室がつぶれるぞ！」

柳原が叫び、助手たちは白衣を翻して部屋の八方に逃げ散るネズミたちを追いかけた。しかしうまく捕まえられた者は一人もいなかった。ネズミたちは倉庫の外に逃げ出した。

生物学研究施設には保安基準が設けられていて、室内の減圧、実験動物の逃走を防ぐ金網・ブロックの設置などが決められている。しかし日本の国立大学の多くは経費削減のためにこの基準を守っていない。先日某研究室から動物が逃げ出したというニュースが流れ、問題になっていた。

群玉大学医学部遺伝子研究室は資金潤沢なのでそのへんはきちんとしている。実験室の出入り口には二重の扉と柵があり、ネットが張ってあ

る。数匹のネズミはそこで捕まった。しかし巨大化した数匹はその強力な歯でネットを食い破っていた。彼らは研究室の外に出てしまった。柳原はやむをえず警報装置のボタンを押し、建物の全体に緊急警報が鳴り響いた。外部への扉はロックされ、開いているドアは閉じられる。ネズミたちの逃げ場はない。

「さがせ、廊下の隅、部屋の隅、どんな小さなところでも見逃すな！」

柳原の指示のもと、助手たちは手に捕虫網を持ち、網のない者は殺鼠スプレーを持って廊下に出た。女助手は大型のゴキブリホイホイを両手一杯に抱え、あちこちに仕掛けていた。ガードマンや用務員もやって来て全館総動員のネズミ狩りが行われたのに三〇分経過してもネズミは捕まらない。そのうち館内に異常が起き始めた。まずコンピュータの通信機能が停止した。次に電話回線が切れた。さらに一部の電気が不通になった。

「どうなってんだ？」助手の一人が言った。

「やつらだ」柳原が応えた。

「ネズミたちが回線を噛み切っているんだよ、LAN回線や電話線を」

ネズミたちは現代の建物はライブ

ラインの断線に弱いということを知っているかのように、次々とコード類を噛み切った。

「床板をはがせ、天井裏に上げれ！」  
誰かが叫んだが、そこまで出来るものはいなかった。

「業者を呼ばないと」  
「しかし、それでは事情が表に漏れる」

教授や研究員たちが額を寄せて相談を始めた。しかしいい知恵は出さなかつた。エアコンが切れ、折からの陽気で館内の温度が上昇し始めた。やがてそれは耐えられないほどの蒸し暑さになった。助手たちは汗だらけになりながら机の下や換気口の中を探し回った。そのうち何人かが気分が悪くなり動けなくなつた。柳原の顔も焦りと暑さで青黒くなつた。彼は着衣を脱ぎ捨て、トランク一枚になつた。そして机と椅子を積み上げ、天井板をはがそうとしてそこによじ登った。しかし下で支えてやる者が誰もいなかったのだから、まち足を滑らせて落下した。打ち所が悪く、柳原英道はそのまま動けなくなつた。

「えらい暑いなあ、どないしたん、なんの騒ぎや？」

どたばたしている助手たちの前に

寝起きの倉持が出て来た。

「倉さん、えらいことです、ウイルス移植したネズミが逃げ出したんです」

「ヒデさんが天井から落ちて病院に運ばれました」

「そうか？……それら災難やなあ」  
倉持は自分が起こした騒ぎなのに他人事のようにうそぶいた。

「そやけど心配いらんで、あのネズミたち暗なつたら出てくるさかいなあわてんでもええ、そないプログラムされてんねん」

生あくびをしながら倉持が言った言葉に、助手たちは半信半疑だったが、やがて夕闇が迫ると本当にネズミたちは廊下に現れた。しかもかなり弱っていて半数はその場で死んでしまつた。

「鳥目の遺伝子入れて寿命のプログラムもいじつといたからな、うまいこといったやろ？」

遺伝子を操作して生命を操る、京大の天才は高等動物でそれを実現したのだった。この騒ぎで倉持研究員はさらに嫌われ者になつたが、研究者としての株は上がった。柳原助手は三ヶ月も入院したのに何も報われなかつた。

## 青い波濤と白い龍

## 第六回

藤川博樹

■ 葬送・遠平さん

常三が石川と知り合い、初めて活動家の会議に誘われたころ、会議の場所はいつも学生寮の一室だった。

学生寮というのは、活動家学生たちのたまり場であるし、サークル活動、クラブ活動の拠点でもあった。

「・・・大学空手部、ただいまからストームをおこなう！」

廊下の端で、空手部がストームを宣言する。寮生たちは軍隊で点呼を受ける兵士のように廊下に出て並ぶ。手にはコップを持って。黒帯を柔道着に締めた酔っぱらいが、一升瓶を抱えて回ってくる。コップにっただ日本酒を一気に飲み干さねばならない。コップがないと一升瓶をラッパ飲みさせる。酒好きの寮生は思わぬ

天の配給に表情が緩んでいる。部屋  
の学生が不在であったり、酒が飲め  
なかつたりすると、遠慮なく正拳突  
きでドアをぶち破る、そんな慣習が  
当たり前のように年々引き継がれて  
繰り返された。どの部屋のドアもぼ  
ろぼろに破れ、ベニヤ板で補修して  
あった。学生寮は、建物の中に青春  
のすべてがあるといつて言い過ぎで  
ない時代の象徴でもあった。

寮の一室に、常三や角田たちが集  
まっていると、秋元と、遠平さんが  
じゃれ合って入ってきた。背の高い  
遠平（エンペイ）さんが、小柄でや  
せた秋元にヘッドロックをしかける  
のだが、顔をゆがめた秋元がとがっ  
た顎を下げて遠平さんの抱えた腕を、  
顎と胸との間に押さえつける。とが  
った顎が遠平さんの腕に食い込んだ。  
「さすがスコップ！」

遠平さんは笑いながら叫んで、首  
に巻いた腕を開放した。顎のとがっ  
た秋元のあだ名はスコップなのだ。  
遠平さんは、遠藤良平という名前  
だが、略して遠平さんと呼ばれてい  
た。

「わたし、革命前夜論にはもう飽き  
飽きたという感じです。イタリア  
共産党みたいなのが理想ですね。歴  
史的和解とか言って、あえて政権を  
取りにいかない。むこうがやると言  
っているのに、あえて取らないんで  
すからね」

遠平さんは、大柄な体にもかかわ  
らず、色白で声はやや甲高く、やさ  
しいお姉言葉を使う。「私の妹は美人  
ですよ」

「それ、ようわかるわ」と沖縄出身  
の自治会のメンバーの南原。「要素は  
揃っている。ただし、組み合わせが

問題や」

遠平さんは色白で鼻は高く、目は  
ぱっちりとして大きかった。顔の部  
品が大きすぎて、イースター島のモ  
アイ像を白く染め、いきなり東京の  
ど真ん中にも持ってきたような違和  
感があった。ゼミで千葉の房総に合  
宿したとき、旅館の庭にあったケヤ  
キの木にする登るので驚いたこ  
とがある。裸の足の裏を幹に密着さ  
せ、真っ直ぐ直線上に繰り出して  
く登り方で、つかまる枝はいらない、  
どんな裸の木でも、一本の鉄棒でさ  
えも楽々と登って行ける技術と身の  
軽さだった。山形の山育ちの文武両  
道の秀才だったのではないかと思わ  
れた。

イタリア共産党は、総選挙で得票  
が五〇パーセントにせまり、与党の  
キリスト教民主党からの政権奪取は

目前なのに、歴史的和解を呼びかけ、単独で政権を取ろうとはしなかった。

遠平さんは長い活動歴の持ち主で、留年を何回も重ねてやはり留年していた石川よりも年上だった。活動は、選挙、選挙、機関紙拡大、機関紙拡大の連続で、いくら運動しても遠平さんには、現実は何も変わっていないように思えた。

そうはいつても、共産党は選挙で勝ち続けていて、石川や角田たちにとつて、昔のことはいざ知らず、これからも共産党は勝ち続けていくに違いないというのが、暗黙の了解事項のようなものだった。大学に入ってからすさんだ生活をして、留年を繰り返していた角田を立ち直らせてくれたのが学生運動だった。渋谷で飲み歩いていた角田は、誤っておか

トの地域福祉活動に参加。そこで知り合った彼女と結婚し、子どもをもうけた。まだ学生だったためさらに留年して進学が遅れたが、生涯の伴侶と政治的目標を得た角田は自分の人生の道筋を見つけることができた。



角田たちが大学に入ってから、共産党は選挙で倍々に議席を増やしていた。そのことは角田や石川たちの自分たちの活動は正しいという自信にもなっていた。だから、「七〇年代の遅くない時期に、民主連合政府の樹立を」というスローガンも絵空事ではないと思つた。

その後、常三が自治会の委員長になり、翌日の報告書を徹夜で準備し

てくれたのが遠平さんだった。常三は委員長なので大会当日の討論の矢面に立たねばならず、体力温存のため早く帰してもらっていた。その他の執行委員も早々に帰つたらしい。

常三が翌朝、前夜自治会のみんなが集まって作業に使っていた学園祭室に入っていくと、遠平さんが一人眠そうな顔をして作業していた。机の上にあつた粗末なラジカセから、ベートーベンの交響曲「英雄」の第二楽章、葬送行進曲が聞こえてきた。他の者は誰もいない。遠平さんはただ一人徹夜でロウ原紙を鉄筆で切り続けていたのだった。原稿は完成して、遠平さんは「これで、わたしは寝かせてもらいますよ」といって部屋の中にある垂直のハンゴ段を上り、中二階のカイコ棚に眠りに入った。

何年かあとに、常三は大学を卒業して生協に勤めていた遠平さんにキヤンパスで会つた。遠平さんは学科の五十嵐教授に大学院への進学をすすめられていたのをことわり、政治

運動から遠ざかつて生協に就職した。同じ学科には遠平さんのように進歩的な考え方をして、学間にも積極的に取り組んでいる学生は少なかったのだ。遠平さんは、自分が活動家であつたことを秘密にしていた。自分で秘密にしていると思ひ込んでいたが、回りの知人友人たちはみんな知っていた。「毎日が神経戦ですよ」と遠平さんはつらそうにささやいた。この神経戦が徐々に遠平さんを追い込んで行った。遠平さんは都会の水になじまなかつたのだ。それから十年ほどして、遠平さんは政治も仕事も恋愛もすべて放り出して故郷の山形に帰り、食べ物を一口も受け付けない状態になって、三十六歳の生涯を閉じた。

## 街中の似顔絵師(五)

瀧本 文彦

渋谷の宮益坂の「タンポポ」と言うイタリア風レストランバーを午後

六時頃出た。外気はアルコールの廻った体に心地よかったが、初対面の女性の前でちよいと飲みすぎたかなと思っただ。

僕は高校を卒業して間もなく和歌山県の白浜の「天山閣」と言うホテルに就職した。その社員寮に住むことになった。先輩社員の部屋に新入社員が呼ばれた。

六畳の部屋で車座になって歓迎会が始まった。目の前にグラスのコップが置かれた。なみなみと日本酒の一升ビンからグラスに注がれた。乾杯の音頭から宴会が始まった。グラスに注がれた日本酒を飲んだが不味かった。

それまでお酒を飲んだことはあるが、正月の日ぐらいいだった。それも

小さなお猪口に入ったお酒を一回飲み、不味いなと思っただ。

目の前にあるグラスにこぼれんばかりにお酒が入っている。僕は大きく深呼吸して飲み始めた。先輩から、「ちびちび飲まず威勢よく飲め。コップ一杯ぐらいの酒でそんな飲み方をしていたんじゃないいい仕事ができないぞ」

と煽られた。僕は少しピッチを早め多めに口に運んだ。儀式のように飲んだ。しかし其の宴会でコップ一杯の冷酒を飲むのがやっとなかった。つまみも有ったろうが思い出せない。グラスに注がれた冷酒と畳の目だけが思い出される。

あくる朝仕事に行こうと起きた。頭痛と吐き気とのどの渴きを感じた。これが二日酔いというものかと思いつながら水道水をがぶ飲みした。それから幾年過ぎただらうか。ス

コッチウイスキーやバーボンウイスキーやブランデーやラム酒やジンやウォッカやアブサンやテキーラや老酎や焼酎や濁酒やワインやビールを飲んだ。今はビール一筋に愛飲している。

妙子さんと渋谷の街を歩いた。僕は道玄坂までいって、「タンポポ」と言うイタリアン・レストランの前で足を止め、

「この店でカンツオーネやシャンソンシンガーの歌の伴奏を二年間していたのですよ。歌伴の合間にジャズピアノを弾いていました」と自慢げに妙子さんに話した。妙子さんは不思議そうな表情で耳を傾けた。どう見ても僕が自分で話すような器用にピアノを弾く男に見えなかったのだらう。

妙子さんは写真クラブに入り写真の撮り方を習っていると話し、ニコソンの一眼レフカメラを持っていてと話した。僕は其の頃、写真を撮られた

るのが嫌いだ。撮られた自分の姿を見て自分の恥部をさらけ出されたようで嫌だった。しかし動植物の写真や風景写真を見るのは好きだった。

背筋を伸ばしシャキッと歩く妙子さんの姿は印象的だった。度の強い眼鏡を掛けていたが、歩く姿を見て運動会の短距離競争ではいつもトップグループに居たのだと思っただ。

僕は女性と歩くのは久しぶりだった。僕と付き合ってくれている妙子さんの優しさに心が弾んだ。

